

【28】潜水稲刈りの話

いつぞや、利根川下流部の手賀沼の講演会で聴いた、地元土地改良区の理事長さんだった農家の御主人の話は、河川屋の私にも衝撃的でした。

利根川への手賀沼の出口に水門が無かった時代には、利根川の洪水が沼へ逆流し、沼沿いの干拓地の水田にも洪水が氾濫して浸水しました。米の収穫期に利根川の洪水の報があると、急いで稲の刈取りを始め、時間との闘いの中、水田に水が入って来ても一本の稲でも助けようと必死に稲刈りを続けました。しまいには胸くらいまで湛水しても息を我慢して水中に潜ってまでも稲刈りをしたのです。

その後、水門が建設されて洪水の逆流が防止され、さらに排水機場も設けられ、今ではその心配も昔話しになりましたと、治水事業の効果に感謝されていました。あまりにも生々しい話なので私をはじめ聴衆も固唾をのんで話に聞き入りました。

流域治水の一環として、降雨や洪水を水田に湛水させるという構想が議論されるこの頃ですが、こういう先人の苦勞話しも忘れないようにしたいものです。